

42000

教科書文庫

4
810
41-1905
20000 81686

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

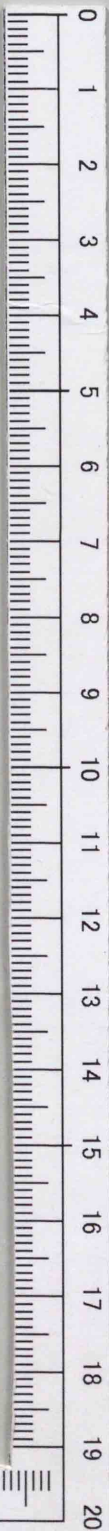
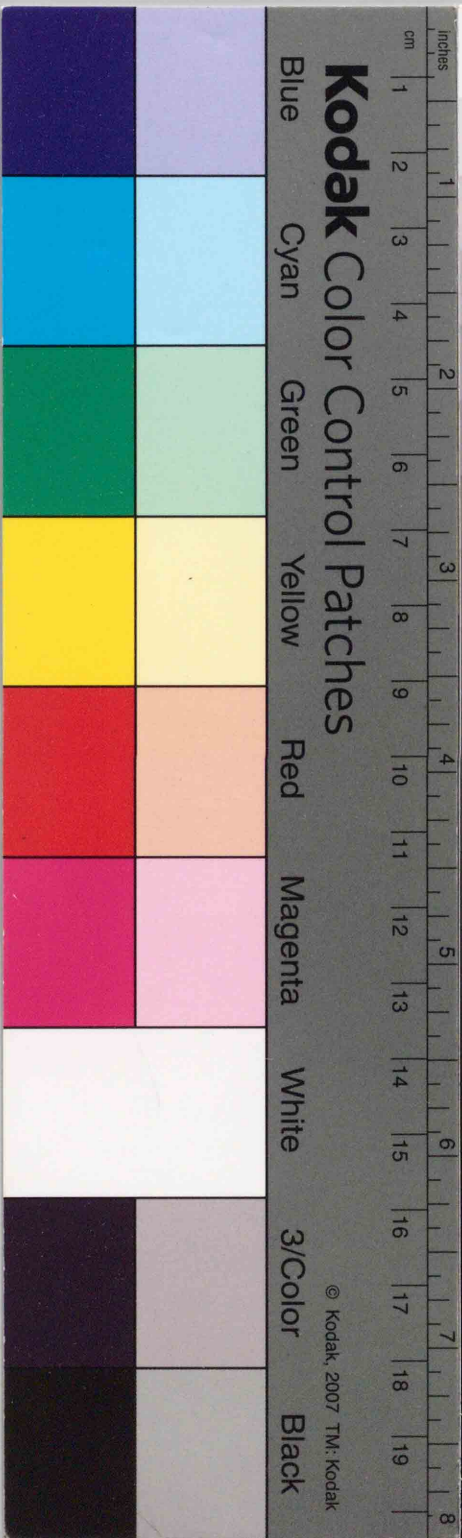


© Kodak, 2007 TM: Kodak

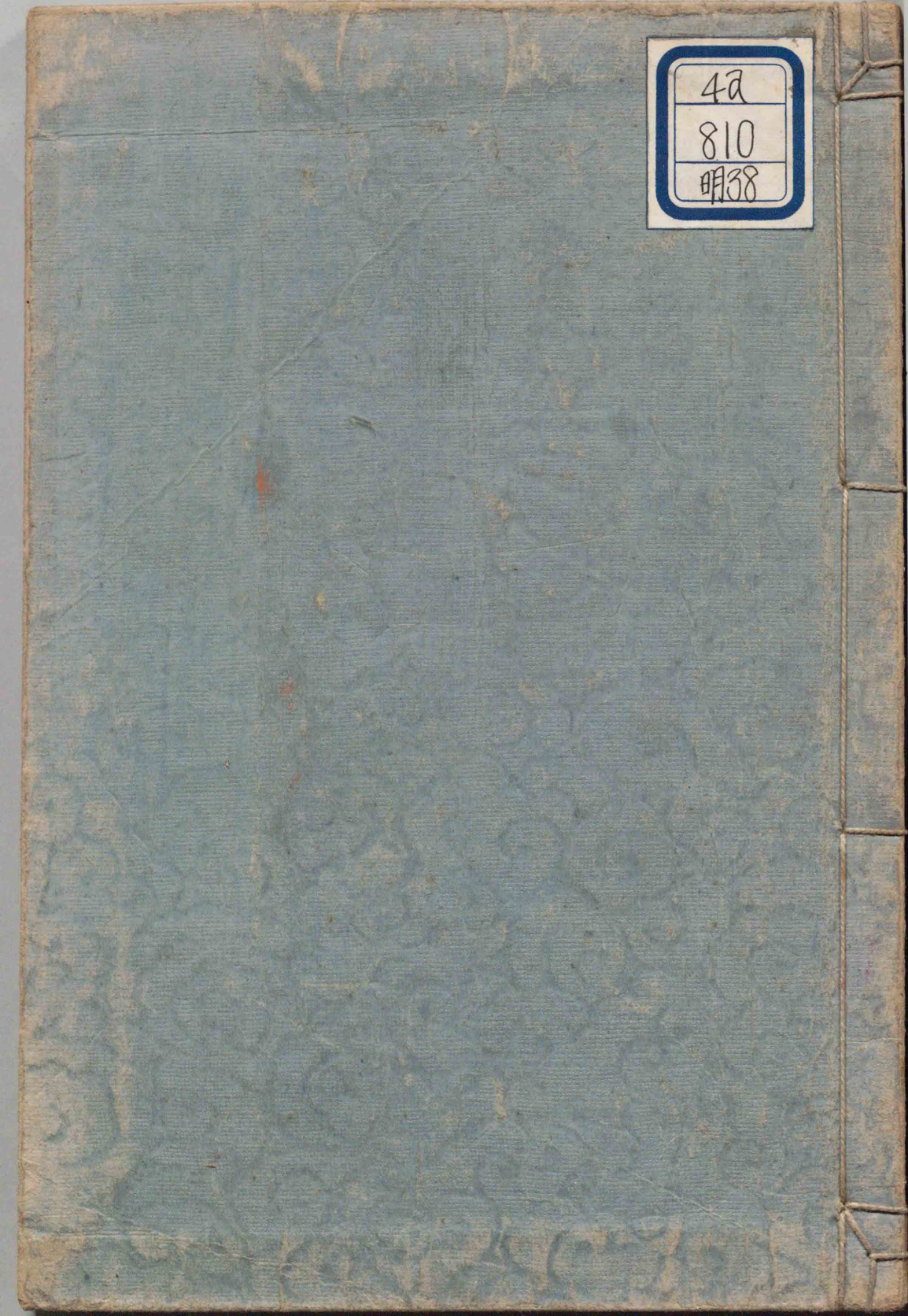
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
明38









4a  
810  
明38

明治三十三年八月三日

文部省檢定  
中華學校國語科生徒用

東京高等師範學校教授兼  
東京帝國大學文科大學助教授  
文學士保科孝一編

# 新撰國語讀本

東京 學海指針社發行



## 新撰國語讀本 卷五

### 目次

一	豐臣秀吉	三上 參次	一
二	武將の歌	新井白石	六
三	淺野長政の直諫	湯淺元禎	八
四	碧蹄館の戰	谷 干城	十二
五	精神	橫井時冬	十五
六	桃山時代の工業	市村瓊次郎	十八
七	北京城その一	市村瓊次郎	二十一
八	北京城その二	(西比利と滿洲)	二十七
九	西比利と滿洲	小笠原長生	三十一
一〇	遼東の月	德富猪一郎	三十五
一一	日本國民の膨脹性		三十九

新撰國語讀本卷五 目次

資料室





一二	生存競争	丘 淺次郎	四十二
一三	海外の出稼	坪内 雄藏	四十九
一四	大 鵬	(唱 歌 集)	五十二
一五	南洋の風光	志 賀 重 昂	五十四
一六	報効義會その一	郡 司 成 忠	五十七
一七	報効義會その二	郡 司 成 忠	六十三
一八	占守島	(中 學 唱 歌)	六十九
一九	トラファルガルの海戦	小笠原長生	七十
二〇	イートン、ハーローの學郷	三 土 忠 造	七十九
二一	運動會	嘉納治五郎	八十三
二二	青年の夏季登山	矢 津 昌 永	八十八
二三	高山の花	川上瀧彌、森廣	九十二
二四	我が家の富	徳富健次郎	九十六

### 新撰國語讀本卷五



#### 一 豊臣秀吉

從來、豊臣秀吉の人物、事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記、繪本太閤記の類の書にして、これらの書は、三國志、漢楚軍談などと共に、普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、亦講談師の種本となりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、これ等の書には、武邊の偉人としての太閤は、稍描き出されたれども、其の他の側面の、殆ど全く忘却せられたるは、まことに惜むべきなり。

太閤は、從來、無學文盲の一武人に過ぎざるとく傳へられたれ

此書は、新撰國語讀本の第一巻である。豊臣秀吉の人物、事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記、繪本太閤記の類の書にして、これらの書は、三國志、漢楚軍談などと共に、普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、亦講談師の種本となりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、これ等の書には、武邊の偉人としての太閤は、稍描き出されたれども、其の他の側面の、殆ど全く忘却せられたるは、まことに惜むべきなり。



ども、決して然らず。太閤が軍陣にての消息などは、咄、嗟に文章を成したるにて、字句の鍛錬なしといへども、天真爛熳、辭簡にして意達し、少しも凝滞する所なし。而して、其の間に、溢るるばかりの情、愛あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年、小田原在陣の中に、母なる大政所へ上りし書中に、**そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わか御なり候て給はるべく候、頼み申し候。**の語あり。千言萬句を費すとも、子の親に對する情愛は、此の「わかくなり給はれ」の一語より適切なるものはあらず。又、北の政所、淺野氏への書中には、ねんごろに文給はり、御けんさんのころして、ねんごろにみまゐらせ候。ことし内には、ひまあけ參るべく候。かならずとし内に參り候て、御目にかゝり、つもる御物がたり申すべく候。せつかく御まち候べく候。等の句あるなり。祐筆の

○此の書は、天正十八年、小田原在陣中に、母なる大政所へ上りし書中に、  
 ○そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わか御なり候て給はるべく候、頼み申し候。  
 ○の語あり。  
 ○千言萬句を費すとも、子の親に對する情愛は、此の  
 ○「わかくなり給はれ」の一語より適切なるものはあらず。  
 ○又、北の政所、淺野氏への書中には、  
 ○ねんごろに文給はり、御けんさんのころして、  
 ○ねんごろにみまゐらせ候。ことし内には、ひまあけ參るべく候。  
 ○かならずとし内に參り候て、御目にかゝり、つもる御物がたり申すべく候。  
 ○せつかく御まち候べく候。等の句あるなり。  
 ○祐筆の

手になりたる文書中にも、かしこここに、太閤の口授にかかれりと思はるるところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少斯かる氣風の必要もありしなるべし。しかも、多數の古文書の上より觀察するとき、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては、最も慈悲の念に富みたる善良の武人なりしを見る。

さて、太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花、今を盛りと咲き亂れたるを賞でて、其の下に低徊せり。後陽成帝遙にこれを覽そなはしてにや、畏くも勅使を遣し、花の折枝に、一首の御詠を添へて、下し賜ひしかば、太閤感謝に堪へず、即ち、

○此の歌は、  
 ○天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に  
 ○伺候しけるに、九重の櫻花、今を盛りと咲き亂れたるを賞でて、  
 ○其の下に低徊せり。  
 ○後陽成帝遙にこれを覽そなはしてにや、畏く  
 ○も勅使を遣し、花の折枝に、一首の御詠を添へて、下し賜ひしかば、  
 ○太閤感謝に堪へず、即ち、



忍びつゝ霞とともにながめしも、

あらはれけりな花の木のもと。

と返歌を上られき。又十六年のことなりけり。北山に狩して、龍安寺に憩へることありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の垂絲櫻未だ綻びず、却つて泡雪のちらく、と降り來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は、

花をおそしとさそひ來ぬらむ。

と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年、諸大名を率ゐて、吉野の花見を催されしとき、關屋の花のもとにては、

吉野山、たれとむるとはなけれども、

今宵も花のかげにやどらむ。

と吟じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を、入あひの

かねこそ、花の恨みなりけれ。

と歌はれたり。巧を弄ばずして、なかくに雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集中にも置きたき心地せらる。此の他、紀州征伐のときには、和歌浦、玉津島にて、九州征伐の途次には、嚴島にて、小田原陣のをりに、清見瀉にて、征韓の役には、肥前の名護屋などにての詠歌も少からず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは、勿論醍醐の花に、大佛の月に、其の折折の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては、古英雄の横槩賦詩の面影を想はしむ。而して、功成り、名遂げたる此の千古の偉人にも、亦無常を感じたることのありてや、

大宮人  
千代子  
千代子  
千代子



露とちり、雫ときゆる世の中に、  
何とのこれる心なるらむ。  
と嘆きしこともありしが、慶長三年八月、其の薨去せらるるや、哀  
れにも、

露とおき、つゆと消えにし我が身かな、  
なにはのことは、夢のまたゆめ。

といふ辭世の短冊をとどめられきげに、太閤は無學文盲の人に  
あらず、伊達政宗、細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして、文藻  
ありしうちの鏘々たる者なりしなり。(三上參次)

二 武將の歌

海邊月

細川忠興

海原や、月にかゝれる雲もなし、

海原や、月にかゝれる雲もなし、

あまの汐やく煙ならでは、

あまの汐やく煙ならでは、

あまの汐やく煙ならでは、

蒲生氏郷

かぎりあれば、吹かねど、花はちるものを、

こころみじかき春のやまかせ。

伊達政宗

おなじくは、あかぬ心にまかせつつ、

ちらさで花を見るよしもがな。

太田道灌

いそがずば、ぬれざらましを、旅人の

あとよりはるる野路の村雨。

いそがずば、ぬれざらましを、旅人の

あまの汐やく煙ならでは、

あまの汐やく煙ならでは、



三 淺野長政の直諫

文祿のはじめ、朝鮮のこと起り同じき二年六月、長政かの國に渡りぬ。石田、増田等と相議し、諸軍勢を率ゐて、晋州の城を攻め落せり。今年の冬、太閤、朝鮮の軍はかばかしからぬを怒つて、徳川殿をはじめ、宗徒の大名を名護屋の陣に集め、朝鮮の軍、今のやうならむには、いつ事定るべしとも覺えず。今は秀吉みづから向はむと思ふ。三十萬の勢を三手におしわけ、利家、氏郷に大將せさせ、三道より向ひ、朝鮮をうち破り、まっすぐに大明に攻め入りなむ。本朝のことは、家康かくてましませば、心にかかる所なし。方々いかにか思ふ。とおほせあり。

徳川殿、御氣色損じて、利家、氏郷に向ひたまひ、日本の大名多き中に、方々二人選び出されて、一方の大將を賜らむこと、弓矢取つての面目、何事かこれにすぎむ。そも、家康いやしくも弓馬の家に生れ、戦の内に年老いぬ。今、この一大事に及びて、いかで、人々のあとに留つて、いたづらに本朝を守り候べき。小勢には侍りとも、家康も軍勢をひきゐて、かならず一方の先陣を承るべし。方々の御推舉を仰ぐ所に候と、の給ひしに、彈正少弼長政、すゝみ出て、しばらく候、徳川殿、殿下この年月の御ふるまひ、昔の御心とや思し召す。年ふる狐の入りかはつて候を、何事をかの給ふべきと申しもはてぬに、太閤御帶刀に手かけられ、やあ。秀吉が心に、狐の入りかはつたるいはれ、きつと申せ。申し損じなば、しやくび打ち落してくれむ。と、せめかけせめかけ仰せけり。彈正ちつとも騒がず、長政等が如きは、何百人が首はねられむにも、なんてふことの候べき。そも、この年頃、よしなき軍起して、異國のみにあらず、本朝に



も、父をうたせ、子をうたせ、兄弟を亡ひ、夫に離れ、妻にわかれ、歎き  
苦む者、天下に充滿せり。また、それより、兵糧の轉漕、軍勢の賦役、六  
十餘州が内、ことごとく荒れ野となれり。今日、御發向あらむには、  
五畿、七道の間、竊盜、強盜、蜂の如くに起りて安き所も候まじ。徳川  
殿いかに思ひ給ふとも、いかてか、これを防ぎて、うごきなく御あ  
とを守り給ふことをかなふべき。これらのことを思ひてこそ、先陣  
とはの給ふらめ。昔の御心あらむには、かほどのこと、などか御心  
づきなかるべき。かかる御心のつかせ給ふこと、これただごと  
にあらず。されば、一定ふる狐の入り替つたるには候はずや。賤しき  
ものの諺に、「人取らむとする鼈は、かならず人に取りらる。」とは、即ち  
この御事にて候ぞ。と、憚る所もなく申しければ、太閤、鼈にもせよ、  
狐にもせよ、おのが主と頼みたらむ者に、雑言をはく條、奇怪なり。

とて、飛びかからむとし給ふを、利家、氏郷おし隔り、人人、御前に伺  
候せり。長政が首を刎ねられむに、御手をおろさるるまでも候は  
ず。そこ罷り申せ、彈正といはれて、長政は、さらぬ體にもてなし、人  
人に色代して、おのが陣に歸り、御使を待つて、腹かき切らむと思  
へるに、重ねて仰せ出さるる旨もなし。  
かかる所に、肥後國に、逆徒起りぬとて、早馬を參らす。太閤大に驚  
き給ひ、徳川殿に御使あつて、長政具して御參りあれ。と仰せらる。  
やがて、長政めし具せらる。太閤、肥後國に逆徒起りぬ。汝が嫡子左  
京大夫幸長追討の使たるべし。とおほせ下さる。長政大に悦びぬ。  
また、徳川殿に向ひ給ひ、幸長いまだ年若し。本多をそへて給ふべ  
し。と仰せらる。やがて、かの逆徒、國人等討つて參らせければ、軍を  
ば出されずなりぬ。(新井白石)



## 四 碧蹄館の戦

朝鮮南大門の軍は、文祿二年正月廿六日のことなり。明の援兵鴨綠江をわたりて押し来る。小西行長かなはずして引き退く。時に、小早川隆景は開城府に留り、一軍せむと待ちかけたり。浮田秀家、使を以て、とく都城に引き返して、一所に軍あるべし。と申されしかども、隆景、吾れ、日本を打ち立ちしより、異國に討死せむとおもひ設けたり。年若い候ひぬ。今生の思ひ出に、異國の大軍にかけ合せ、大國の耳目を驚かす軍して、屍を戦場にさらさむと存ずるところなり。とて、引き取らむ氣色なかりければ、又、大谷吉隆を遣して、洵に雙なき志、古の名將もこれには過ぎじ。さればとて、二萬許の兵にて、大軍に取り巻かれ、空しく討死あらむこと、口惜しく候

只疾く都城に入りて、日本の軍の先陣せられ候へ。とありしかば、隆景、さらば、日本の先陣は、隆景仕らうざるにて候。人に先陣をばかけさせじ。とて、黒田長政、久留米秀包、打ち連れて、都城に歸られしが、南大門の外、碧蹄館に陣せられけり。廿六日の曙に、李如松が軍押し来る。旌旗を立てつらね、何十萬とも測るべからず。秀家を始として、大軍に野合の合戦危からむ。都城に楯籠らむ。といはれし時、立花宗茂、目を見出し、刀の柄に手を懸け、敵こはければとて、逃げこもる様や候。只馳せ合せ、蹴散して候はむものを。と勇まれしかば、さらば、誰か先陣せむ。といふに、隆景、吾れ先陣せむと豫ねていひつることよ。誰人にもあれ、思ひもよらず。とて、頓て陣を進めらる。士大將、粟屋四郎兵衛、村上彈正、野島掃部、三千許、をめきさけんで相戦ふ。立花宗茂、久留米秀包、毛利元康、六千餘り、奇兵と



なり、右の方三町餘りに陣せしが、横様にかかる。隆景旗本一萬餘を率して、一文字に切つて掛り、忽ち敵を討ち破り、首數多得られたり。宗茂取りたる首二つ、鞍の四方手に付け、隆景の方に來られしを見て、取り敢へず「見事に候」といはれしかば、宗茂「毎も仕るに候」と答へられたり。此の軍いまだ始まらざりし時、黒田長政、唯一騎、歩の士六七人召し具し、隆景の旗本に來る。隆景「よくこそ來られ候へ。先陣の粟屋に、力を添へ給へ」といはれしに、長政悦びの色、面にあらはれて、「承り候」とて、先陣に向はれたり。殊に寒風はげしう吹きたりければ、長政大綿帽子を被られしが、先陣に行きて、ばうしをぬいて、世に聞えける水牛の冑の緒をしめられたり。隆景の軍兵ども之を見て、「けふの軍に勝ちたり」と勇みけるとかや。長政、ことし廿五歳武勇をかく人に信ぜらるること、なみなみにはあらざりけり。(湯淺元禎)

### 五 精神

われわれ日本人は、日本魂といふ最も鞏固なる精神をもてり。この精神をもちて、この日本國を護り來りしかば、古より他國の侮をうけざるのみならず、世界無比の國なりといふ名譽をさへ得るに至れるなり。今後、この名譽を保たむも、失はむも、この精神の如何にあるべきを、おひおひ、この精神を持てる者のすくなくなりゆくは、いかにぞや。

日本魂といふ精神をもてばこそ、まことの日本人なれ。これなくば、形こそあれ、まことの日本人とはいふべからず。何となれば、さる人は、亞米利加へ行かむには、亞米利加人となり、英吉利へ渡ら



むには英吉利人となるべければなり。むかし、山崎闇齋といふ學者ありき。ある時、その弟子に向ひ、若し、孔子、孟子が大將となりて、この國に攻め來らば、いかにかする。」と問ひしに、弟子ども答ふる能はず。闇齋容をあらため、何をか躊躇する。たとひ、孔子、孟子なりとも、この國に害をなさむには、直にうちはらふべし。これ、やがて、孔子、孟子の教ならずや。」といへり。また物徂徠といふ學者ありき。こは、きはめたる支那崇拜者にて、なにごとくも、かれを尊ぶあまり、遂に「東夷の物茂卿」と自稱して、怪まざるにいたれり。闇齋といひ、徂徠といひ、おなじく漢書を讀みたるものなり。さるに、そのいふところ、かく異なるは、一はこの精神を保ち、一はこの精神を失ひたるがためなり。この徂徠の如き人のみ多くならむには、この日本國の前途をいかにかせむ。

世人は、ともすれば、富國強兵を口にせり。余おもふに、いかに學理は進歩すとも、實業は發達すとも、これに従事する人にして、この精神を失はむには、國家にとりて、何の利益もなからむ。また、海に千萬の艦艦を浮べ、陸に億萬の巨砲をならぶとも、それを運用する人にして、この精神なからむには、ただ一の形容の具に過ぎざらむ。いひかふれば、富國策も、強兵論も、日本魂といふ精神を定めたる後にすべきなり。それを定めざるうち、到底その實をあぐること能はざらむ。

要するに、日本魂ありて、はじめて日本人なり。日本人ありて、はじめて日本國なり。われわれ日本人たるもの、この日本魂といふ精神を失ひて可ならむや。(谷干城)



## 六 桃山時代の工業

豊臣氏の起るや、難波石山の大阪城を初め、京師内野の聚樂第、伏見桃山の第など、續々大土木を起したるが爲め、我が建築術の上に、一大進歩を來したり。殊に桃山御殿の建設は、文祿の三年に當り、秀吉十四萬の貔貅を叱咤して、韓の八道を蹂躪し、武威を海外に輝かしし頃なりしかば、其の建築、彫刻等の上にも、豪邁の氣象自ら顯れ、美觀、雄矩共に一世を壓したり。

桃山の建築は、今詳に考ふべからざれど、瓦の端を黄金にて塗り、百間廊下に、黄金の燈籠を釣りしなど、其の壯觀想ふべきなり。今も世に桃山の式を受けて建築したるもの、山城、近江あたりの寺院にありて、其の式皆一定に出でたり。例へば、長押、鴨居を黒漆にて塗り、其の上に蒔繪を施し、襖に黄金を張り付けたるなどの類にて、皆其のかみ、豊太閣の意匠に出でしものなりと云ふ。京都には東本願寺の飛雲閣の建築、又今の豊國神社の門扉の彫刻など、桃山遺物の現存するものあれば、就て其の一斑を窺ふべし。豊太閣は、獨り此等外部の建築、彫刻等に意を用ひしのみならず、茶器の類より、衣服調度の類に至るまで、己が意匠を工人に授けて、作らしめしもの多かりき。筑紫の陣中にありて、征韓の軍を指揮せし時すら、佐志山に窯を築き、種々の茶器を作らしめ、又己が意匠を日記に圖して、はるばる京師に送り、茶入を焼かしめ、蒔繪をまかしむるなど、常に意を工藝の上に注ぎて、獎勵せられしかば、京都、伏見の間に名工輩出して、工藝の隆盛を極めたり。

後藤徳乗の刀、劍具、埋忠明壽の鏝、一條國廣の刀、樂常慶の茶碗、幸



阿彌長晏の蒔繪、盛阿彌の漆器、西村宗全の土風爐、浪越與次郎の  
罐子、嘉長の金具、是閑吉滿の假面、左近の挽物等、何れも、豊太閤の  
寵遇の下に、各其の技の精華を發揮して、桃山時代の趣致を代表  
せるものなり。元和以來、京都、伏見に住居せし豊臣氏恩顧の工藝  
家は、散じて二つとなり、一は江戸に入り、一は加賀に入れり。是に  
於て、蒔繪、金屬、彫刻等の美術、始めて加賀に入る。さて、江戸に入り  
しものは、社會の變遷と、時代の風尚とに連れて、後には全く桃山  
の遺風を失ひしかど、加賀に入りしものは、北陸の別天地にあり  
て、其の遺風を子子孫孫に傳ふることを得たり。是れ加賀の美術、  
工藝の特色にて、世は江戸將軍の時代となりても、加賀蒔繪、象眼  
など稱して、賞翫するもの多かりし所以か。(横井時冬)

## 七 北京城 その一

北京は、清國の首府にして、直隸省順天府の大興、宛平の二縣より  
成れり。東經百十六度二十八分、北緯三十九度五十七分に位し、東  
は遙に渤海を控へ、西北は一帶の山脈を擁したれど、南は沙漠た  
る平原にて、千里極りなし。舊時は、南方或は東南の地方より北京  
に赴くもの、皆陸路によるか、或は、白河を泝りしが、今は、鐵路已に  
開け、一條は、天津を経て、塘沽に出て、一條は、保定府を経て、正定府  
に達す。前者は滿洲の鐵道と連り、後者はいはゆる蘆漢鐵道にし  
て、湖北省の漢口に達すべきものなり。故に、交通昔日の如く、不便  
ならず、城内の人口は、或は百萬、或は二百萬と稱すれども、實際は  
五六十萬に過ぎざるべし。

京城を内城と外城とに分つ。内城の周圍は、六里許にして、堞壁を

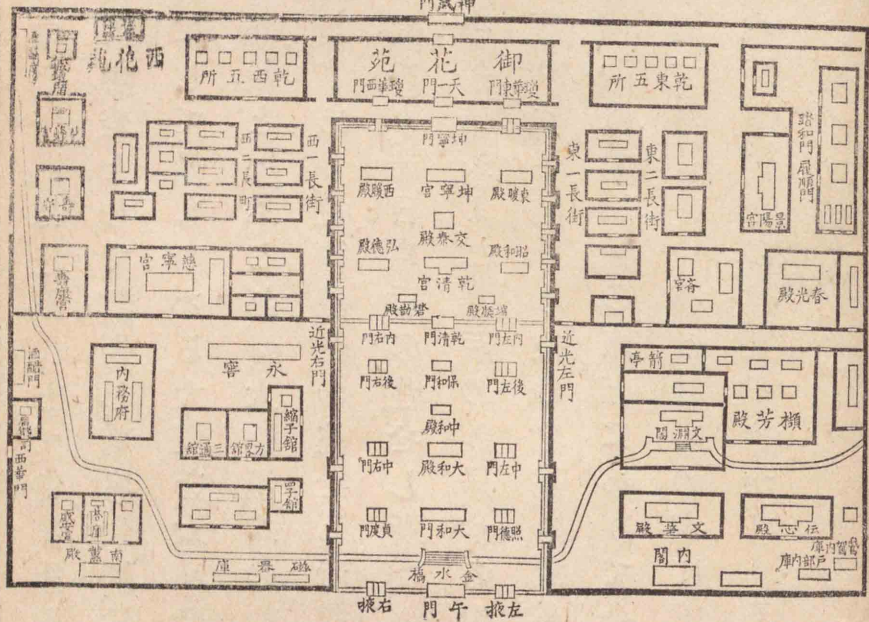






内城の中央を皇城とす。周圍一里十町餘、黃瓦朱壁の女牆を繞らす。その高さ一丈八尺、厚さ六尺前後なり。南に天安、北に地安、東に東安、西に西安の四門を建つ。天安門の南に大清門ありて、正陽門に對し、北に端門ありて、紫禁城の午門に對す。皇城の西邊に廣大なる苑圍あり、西苑と稱す。中に大液池ありて、稍瓢箪の形をなす。池の中央に、大理石にて造れる橋梁を架す、これを金鰲玉煉といふ。又、池の北方に瓊華島といふ島嶼あり、島内樹木多く、丘上に石塔ありて、遠方より望むを得べし。池の西岸の地には、宮殿樓閣の散在せるもの少なからず。その北方なる紫光閣、南方なる瀛臺を、最も美觀とす。夏時、苑中に至れば、池内の荷花亂れ開き、岸上の楊柳茂り合ひ、清風徐に來りて、塵慮の頓に空しきを覺ゆ。瓊華島の東方に當りて小山あり、之を景山といふ。高さ十五丈。北京城中に

紫禁城全圖



て最高の地なり。山上に小亭あり。これに倚れば、紫禁城を眼下に瞰ることを得べし。

紫禁城は、皇城の中央にありて、周圍三十丁ばかり、皇城と同じく、黃瓦朱壁の女牆を繞らす。其の高さ二丈、厚さ二丈餘あり。南方の門を午門とし、東方の門を東華と稱し、西方の門を西華と稱し、北方の門を神武と



稱す。中に、午門は三闕にして、傑閣、重樓最も壯大なり。此の内に、宮殿、樓門參差として散列し、黃屋、朱壁、日光に映じて燦爛たり。其の中央にして、最も南なる大厦を、太和殿と云ひ、其の北なるを、中和殿、保和殿といふ。これ、皆大禮儀式の時に用ふる所なり。又、其の北に乾清宮あり。往時、皇帝の住せし所。次に交春殿あり。又、其の次に坤寧宮あり。昔日、皇后の住せし所なり。乾清宮の西方に養心殿あり。現今、皇帝および皇后の起居する處。其の北に翊坤宮あり。皇太后の座臥する處なり。彼の名高き武英殿は、近年焼けて跡をなけれど、文淵閣は太和殿の東方にありて、今猶ほ四庫全書三萬六千餘冊を藏す。宮殿の建築は、精巧の趣に乏しと雖も、宏大の點に至りては、我が國舊來の建築のなか〜及ぶ所にあらず。

## 八 北京城 その二

市街は、區劃井然として、内城の東西に、各、南北に通ずる一條の大街あり。一は崇文門より安定門に達し、一は宣武門より德勝門に達す。又、北邊に、東西に通ずる大街ありて、東直門より西直門に達す。外城の大街は、正陽門より永定門に至るを、正陽大街といひ、又、東西に通ずるを慶寧大街といふ。此の大街を本として、無數の小街を縱横に設けたり。大街の道幅は、殆ど二十間餘あり。人道と車道との別あれど、修繕の届かざるを以て、自然の頽敗に任せ、雨ふれば、泥濘、車軸を没し、晴るれば、埃塵空を蔽はむとす。家屋は大抵煉瓦より成りて、二階あるもの少し。その新なるものは、門扉、招牌、金碧熒煌として、人目を眩せむとす。然れども、其の舊きものは、塵埃堆積、觀るに堪へざるもの多し。城内の最も繁華なる處は、内城



の東四牌樓の附近、外城の正陽大街の北部にして、百貨輻湊、商賈群集す。正陽大街の西方なる瑠璃廠は、書肆、骨董舖、軒を並べ、縹帙、黃卷、閣に滿ち、玉器、銅器、磁器、書畫の類、眞贋並び陳す。道路を行く大官は、轎子に座して出入するを常とすれど、中流以上の人は、多く驟車に乗りて往來す。近來は人力車大に行はれ、到る處の街上に、客をのせて走るを認む。

内城にて觀るべきは、孔廟及び雍和宮なり。孔廟は内城の東北隅にあり。大成門を入れば、大成殿あり。孔子及び十哲の靈位を安んず。殿前に清の歴代皇帝のたてたる牌樓相並び、門外に進士題名の碑多く、老檜森鬱、夏猶ほ寒し。雍和宮は喇嘛教の伽藍にして、規模甚だ大、僧侶の數、三四百人に過ぐ。外城に於ては、天壇、先農壇あり。永定以内の大路を挾みて、東西に並び立つ。東を天壇と稱す。皇

帝天を祭る所。西を先農壇と稱す。皇帝の農を祭り、籍田に耕す處、面積甚だ廣し。城外に於ては、阜成門外の白雲觀は、元の道士丘長春の開きし所、毎年二月には、士女の參詣するもの群集すといふ。安定門外に黃寺あり。喇嘛教の寺院にして、境内甚だ廣けれど、堂宇頽廢して、觀るに堪へず。北京を距ること一里許の處には、頤和園あり。皇太后離宮のある所、樓閣の、萬壽山に倚つて、昆明湖に臨むもの、甚だ壯麗なり。又、その近傍に玉泉山ありて、茂林清泉、幽邃閑雅の勝に富む。

北京は、夏期、日中頗る暑く、寒暖計、華氏百度以上に上ることありと雖も、夜半より、拂曉にかけて、稍冷氣を感じず。或は雷雨一過、時に炎塵を洗ひ去るが如きこと少からず。冬期は、寒冷甚しく、北風凜冽、沙磧を飛して、一天濛々たることありと雖も、空氣乾燥、降雪多



からず。一年の中、最も爽快を覺ゆるは、秋期十月の頃なるべし。日光愛すべく、風意寒からず、夜間、一天の月色凜として、光芒人を射、雁聲嗷々、頭上を掠めて過ぐるときは、人をして横槊賦詩の情を起さしむ。

按ずるに、北京の地は、周の幽州にして、春秋戰國に燕國の據りし所、秦、漢の漢陽郡、廣陽郡の地、三國以後、燕郡と稱し、隋唐また幽州と稱す。范陽及び盧龍節度使の治所たり。五代のとき、契丹に入りしより、南京、幽都府と稱し、又、改めて燕京、折津府と稱す。金また中都、大興府と稱す。元の世祖、都を茲に奠めて、大都と稱す。明初、燕王の封ぜられし所なりしが、其の篡立するに及びて、都を茲に移し、順天府と稱す。今の内城は、即ち永樂時代に築きしもの、外城は嘉靖年間に増築せしものなり。清の世祖の時、また此の地を以て國

都としてより、今日に至るまで二百五十餘年なり。余、曾て論ずらく、北京の地、西北に連山を控へ、東方に大海を擁し、以て南方を壓するに足ると雖も、滿洲及び蒙古に、勢力の根據なければ、帝都として、支那全國を支配するに足らずと。今や、清の發祥の地たる滿洲は、已に他國の占領に歸し、蒙古の地、また將に動搖せむとす。余竊に恐る、他日、北京は、洛陽、長安と、其の歸を同じくし、訪古の客をして、荆棘銅駝の感あらしめむことを。(市村瓊次郎)

## 九 西比利と滿洲

西比利の事情究明せられざるや久し。世人、動もすれば、西比利は、其の疆土如何に廣漠なりとも、極北に僻在し、地味瘦瘠、寒氣凜冽、一年の過半は、氷雪の爲めに封鎖せられ、殆ど人類の棲息に適せ



ざる邦土の如く思惟するは、これ僅に西比利の一斑を窺ひ、以て全豹を推すの誤謬に出で、未だ其の真相を解せざるの致すところなり。西比利は、氣候と地理との關係上、其の全土を擧げて、悉く之を利用し得ざるは、勿論なれども、其の州縣到る處、農耕に適する地なきにあらず。西比利に於けるトボルスク縣、トムスク縣及びエニセイ縣の南部のごときは、沃野千里、最も耕耘に適し、村落は各處に星布し、鶏犬の聲相應ずるの觀あり。其の産出する穀物は約二億布（ポ）に上り、家畜は一千五百萬頭の多きに達し、其の産品は、地方の需用を充たし、尙ほ綽々として餘裕あり、近年、鐵道の開通とともに、歐露及び外國の市場へ輸出する産額は、禾穀類に在りては、約一千万布、家畜及び家畜産品に在りては、約五百七十萬布の多額にして、逐年増進の勢を呈す。住民生活の程度も亦、低卑

ならず。其の衣食住に至りては、歐露の農民に比し、毫も軒輊するところなく、却て之に勝るの事實あるは、各目撃者の、夙に認識する所なり。東西比利に至りては、開拓、日尙ほ淺く、人煙未だ西比利の如く稠密なるに至らざれども、露政府が、銳意、移住を獎勵するの結果、農民の數は、漸次に増加し、黑龍州及び沿海州の一部に於ける農業は、著々歩武を進め、其の効果の見るべきもの少からず。黑龍州の農産物は、既に其の地方の需用を充たすに至れり。しかのみならず、西比利は、其の全土を通じて、殆ど礦物及び其の他の天然物に富まざるの地なけれども、今尙ほ之を採掘利用するの勞力と資本とに乏しく、唯採金業は頗る發達し、一ヶ年の産額、約二千九百萬留に及ぶ。其の他、西比利において、遺利の收むべきもの、事業の興すべきもの、一にして足らず。今や、西比利及び東清







る師走も、いつか半を過ぎ、今宵最後の望の夜となりぬ。更けゆくまゝに、風なき、水平かにして、天地たゞ寂々寥々、獨り寒月鋭く冴えて、大和尚山の頂に懸り、峰に斑の残んの雪をあるか無きかに照すも淋しく、前方近くに、數ヶ所の砲臺、屹然空に聳えながら、是れ亦闌として眠るに似たり。右方を顧みれば、柳樹屯の村は烟の如く、肌寒げなる冬木立の間、散點せる賤が伏家に、未だ寢ぬ火影二つ三つ。細民、國家の危急を悟らず。何をか爲し、何をか語る。蠢乎として報國の念慮に乏しき彼等の境遇、轉た憐むべし。これに比して、我が國民が、國家に捧ぐる赤心のいよく、大且つ忠なるを知る。その良人、その子は、召集一令の下に、銃を肩にして立ち、千里の波を蹴て、數度の激戰、常に凱歌を奏し、陣中であつて、月の圓なるを見るこゝに七回。その妻、その父母は、家を守り、幼兒を育て、費

を節し、産を傾けて、獻金の後れむことを恐れ、四千萬人の熱血、さながら燃ゆるが如し。往くも留まるも、君の御爲、國の爲を思うて、固より一點の未練なからむ。それ然り。然れども、熱血の裏面は即ち多涙なれば、今宵この明月を觀て、豈に一點想望の情なきを得むや。余も亦、念頭忽然として母の佛を浮べ出でぬ。

「生きて恥、死して恥なる時しあれば、たゞ心せよ、武夫の道。」これ、旅順の大勝を祝して、遙に余にたまひし書簡の端に、母がしるせる和歌にぞある。一讀、再讀、繰り返すにつれ、教訓の深意、いよく深く、自らわが短才愚鈍にして、一介の功なきを嘆ずるのみ。母は子を愛して、愛に溺れず。故に屢書を寄せて、常に余を勵ましなからも、斯く曰ひき、自愛せよ。職務に死するは母も、喜んで勸むべけれど、もし病に斃るゝか、或は、軍半途に送り還さるゝことあらば、母



はなんぼう口惜しからむ。とされば、習はぬ身の跣足に、針の如き霜柱踏み碎きて、神へ日參し給ひつゝ、皇軍の勝利と余が武運の長久とを祈り給ふこと、六ヶ月の間一日も惰り給はずと聞く。殊には、夜襖を重ねず、足袋をもはかず。又、侍女に、暑し、寒しの二語を禁じ、以て遠く余の辛苦を分たむとし給ふ。その慈愛なにか譬へむ。これに報ゆるは猛進の一事あるのみ。余は艦橋の欄干に凭り、沈思これを少焉する折しも、忽然胡歌の聲あり。濱邊の一隅に起り、斷續して響く。その節、一長一短、一高一低、喃々として咽ぶが如く、切々として怨むが如く、悲愴漫ろに骨に徹し、兵士皆頭を低れて之を聞く。無心の月は、今いよゝゝ冴え、凜として中天に舞ひ、凄景一入凄景を加へ、十餘の艦影水に落ちて、夢よりも淡し。

(小笠原長生)

一一 日本國民の膨脹性

孩兒の成長尙ほ悦ぶべし。況や國民の成長に於てをや。今や、我が日本國民がいかに成長しつゝあるかを見ずや。彼れ等は、日本國以外に、日本國を建設しつゝあるにあらずや。

苟も建國の歴史を一讀したるものは、開國進取の、我が邦建國以來の國是たりしを知らむ。我が國歴史の源たる神代史に溯れば、其の靈怪なる口碑は、海島、船舶、鯨鰐、總べて海上に關すること、猶ほ支那の神代史の五色石、天柱、地維、車馬、蛇身、牛首等、總べて陸上の觀念を帶ぶるがごとし。吾人が祖先は、沙漠たる大海を見ること、平原曠野に異ならず。彼れ等は、一葦もて山なす、大波巨浪を破ること、恰も平地を踏むが如くなりき。されば、我が邦の主權の朝



鮮半島に及びたるは、歴史以後の事實にして、今尙ほ文獻徴するに足るものあるなり。神后の遠征、任那府の設置、其の一斑を知るべし。

維新開國以來二十餘年、我が國民は頓に進取の氣象を發揮し、其の大膽なる運動を試みつつあるなり。嘗て參勤交代、伊勢參宮を以て、生涯の大遠征となしたるもの、嘗て十里の路を行くにも、糧を齎らし、二十里の旅行をなすにも、別筵を張り、水杯をなし、泣きつ泣かれつしたるもの、今や、如何なることを企てつつあるか。足は閩門の外に出でず、島國にありて、海を見ざる農夫すら、悦んで布哇の出稼に應ずるにあらずや。其の身東京に遊ばずして、却つて三千哩を隔つる桑港に遊學する書生あるにあらずや。今や、我が同胞は、南極星の直下に於て、千尋の海底に眞珠を探るものあり。黑龍江の末流に鮭鱒を漁するものあり。椰樹蔭をなし、輕雨屢至り、終歲、春を知らざる火山島に、砂糖樹を栽培するもの二萬餘人あり。葡萄顆々として紫玉を垂れ、林檎累累として紅丸を綴り、終歲冬を知らざる北米の野に、五千有餘の同胞は、隱然として一の小共和國をなせり。夫の朝鮮近海の漁舟に至りては、免許を受けたるもの既に二千有餘艘、其の利益二百萬圓以上に出で、朝鮮の沿海は、事實に於て我が國の版圖たるなり。されば、彼の羅針盤を有せず、測量器を有せず、氣壓計を有せず、唯經驗と熟練と大膽とを以て、星辰を觀、潮候を考へ、雲氣を察し、三枚板の扁舟を操り、逆まく怒濤に出没する漁夫は、我が帝國の版圖を擴張するに於て、實に首勳に推さざるを得ず。

此の如くにして、我が同胞は海外に殖民をなしつつあり。若し今



後四半世紀を經過せば、太平洋の波濤の及ばむ限り、黒潮の暖流の滯洄せむ限り、殆ど我が新故郷を見ざる處なきに至らむ。吾人が將來を指點して、日本膨脹の時代となすもの、洵にゆゑあるなり。  
 (徳富猪一郎)

## 一二 生存競争

地球上には、動植物各種をして、自由に増加せしむべき餘地は少しもない。そこへ、動植物の各種が、遠慮なしに多數の子を生むのであるから、互の間に劇しい競争の起るは、見易い道理ではあるが、其の有様を詳しく論ずるには、先づ諸生物の生活する有様から考へてかからなければならん。

動物の中には、獅子、虎、狐、狸の様に肉を食ふものもあれば、牛、馬、羊、鹿の如くに草を食ふものもあるが、獅子、虎等の餌となるものは、矢張り草を食ふ動物ゆゑ、動物の食物は、直接にか間接にか必ず植物より取るの外はない。又、海産の動物を取つて見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふ様な具合で、どれもこれも皆肉食動物ばかりの様であるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する、無限の微細藻類を餌とするから、此の場合にも、動物の食物の根元は矢張り植物界にある。然らば、植物は何を食ふかといふに、陸上の植物ならば、空中より炭酸瓦斯を取り、地中より水と鹽分とを取り、水中の植物ならば、水中より總べての養分を取り、孰れも、日光の力を借りて、自分の體質に造り換へ、成長し繁殖するのである。それ故、綠色を呈する植



物は、全世界の生物總體に對し、食物供給の役を務めるものといつて宜しい。

斯くの如き有様ゆゑ、植物なしには、草食動物は生きて居られず、草食動物なしには、肉食動物は生きて居られん。草を食はなければ生命が保てんのが、草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初より毎日若干の草を犠牲に供する積りてなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てんのが、肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初より日々若干の動物を殺す覺悟でなければならん。草と草食動物と肉食動物とが、相並んで互に犯さず、共に生存して行くといふことは、到底出來んことである。

昔、印度の釋迦が、山中で難行苦行をしてをられる處へ、惡魔が試

しに來た話がある。先づ鳩に化けて飛んで來て、「お釋迦様、今、鷹が私を捕つて食はうと追ひ掛けて來ます。何卒憐れと思つて御助け下さい。」といったので、釋迦は直に鳩を懷に入れて隠してやつた所へ、又惡魔が直に鷹に化けて飛んで來て、「お釋迦様、私は久しく物を食はず、非常に腹が減つてをります。今追ひ掛けて來た鳩を食はなければ、必ず直に餓死します。何卒憐れと思つて今の鳩を出して下さい。」といった故、釋迦は如何したら宜しからうと思案した後、自分の腿の肉を少し殺ぎ取つて、之を鷹に與へ、遂に鳩をも鷹をも助けられたといふことである。素より是れば、苟くも慈悲忍辱を旨とするものは、此の心掛けてなければならんといふ譬で、教訓としては最も妙であるが、實際此の方法で、鳩も鷹も助けられるかといふに、中々左様には行かん。若し世の中に鳩も



一羽、鷹も一羽より無く、之を僅に一日だけ助けるのならば此の方法で差支はないが、總べての鳩と總べての鷹とを、兩方ともに、何時までも助けることは決して出来ん。幸ひ悪魔が一回だけよ、り鳩と鷹とに化けて來なかつたから宜しい様なもの、若し根氣よく、此の試しを何回も繰り返し、又、鳩に化けて來て隠して貰ひ、又鷹に化けて來て、腿の肉を殺いで貰つたらば、一度に半斤づつとしても、十回には五斤となつて、今度は釋迦が死んで仕舞ふ。又、長閑な春の日に野外に散歩して見ると、草木の青々と茂り、花の美しく咲いてをる處に、蝶が面白さうに飛び廻り、小鳥が樂しさうに歌うてをる。詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪に畫いて、共に此世の樂しさを賞め讃へるが、是れは極めて皮相な感じて、少し丁寧な考へて見たらば、世の中は、決して斯く無事平穩なものではない。鳥が斯く歌うてをられるのは、今日までに、數千萬の蟲を食ひ殺した結果で、歌ひながらも尙ほ蟲の命を取らうと探してをる。又蝶が斯く舞うてをられるのも、幼蟲の頃に、澤山の菜類を食ひ枯らした結果である。而して、彼處の樹の枝には、蝶を捕へて食はうと、蜘蛛が巧に網を張つて待つてをるし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つてをるから、蝶の命も、小鳥の命も、殆ど風前の燈の如く、一つ油斷すれば、忽ち食ひ殺されて仕舞ふゆゑ、中々氣樂に遊んでばかりはをられん。動植物は總べて斯くの如く相殺し相食つて、自然界の平均を保つてをるのである。

斯かる所へ、年々歳々動植物の各種が、夥しく子を産むのであるから、其の多數は、無論他の動物のために餌として食ひ殺され、生



き残るものも、餌を得るために甚だしく相争はなければならぬ。動植物の増加力は、實際無限であるが、それは代々生まれる子が悉く生存し、繁殖するものと假定した上のごとで、現在の如く、毎回生まれる側から、他の動物に其大部分を食はれて仕舞ふ場合には、素より著しい増加の出来る筈がない。尙ほ其の上に一地方に於ける各種の動物の食物の總量には、常に制限があつて、生き残つたものを皆養ふことは到底出来んが、假に兎が一疋居るのを、犬が二疋で見付けたとしたならば、先に兎を捕へた犬は飽食し、後れた方は餓死せねばならぬ譯ゆゑ、如何なる動物も食ふための競争は免れぬ。又、兎の二疋居る所へ、犬が一疋來れば、速く逃げた兎は生き残り、遅い方は食はれて仕舞ふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれんための競争も避けることは出来ぬ。動植物ともに各自皆食ふ様に、食はれん様に、殺す様に、殺されん様にと競争してゐるのが、實際の状態で、之を生存競争といふのである。

(丘淺次郎)

### 一三 海外の出稼

我が國人の海外に出稼する者、年々に増加す。北米に赴くもの最も多し。就中、合衆國のカリフォルニア及び其の太平洋沿岸の諸州に多く、英領カナダのバンクーバー附近は、これに次ぐ。合衆國の南部アリゾナ州及びニューメキシコ州などに出稼せるもの少からず。カリフォルニア地方に出稼せる日本人は、其の數凡そ五千人と算せらる。桑港を根據として、北はサクラメント、南はロスアンゼルスの間、フランスノ、ワッソンビル及びバビルカ等に散在す。其の業務は農事を主とすれど、季節に應じて、來去する勞働者もあ



り、雜商工を營む者もあり。されど、農業者と雖も、田畑、牧場を私有せる者は、一もなし。概して、土地の農家に雇はれて、僅に一弗か一弗半の日給にて働く者のみ。商工業家もまた、商家或は工場に雇はれて、日給を得るを常とす。獨立自營せる者としては、花卉の培養を業とせる少數の植木屋及び靴屋、竹細工師などあるのみ。

さて、北方はオレゴン州、ワシントン州乃至アイダホ、ワイオミング、モンタナ等の諸州にも、多少の出稼人あり。鐵道工事に従ふもの、材木の伐り出しに従ふもの等を第一とす。他は雜種の勞働に従事す。總數、凡そ千五百餘名なり、といふ。

又、バンクーバー附近に在る者は、大抵皆石炭坑夫なり。人數は今四百餘名に及べりといふ。この邊は鮭の産地なれば、冬季には、漁場に雇はれて、漁夫となるものも、年年千人以上あり。

メキシコ及び南亞米利加のペルーへも、年年多數の出稼人渡航す。されど、北米に次ぎて、我が國人の多く集まれるは、南洋の諸島なるべし。中にも布哇に最も多し。クインスランド及びニューカレドニアは、之に次ぐ。布哇に在る者は、主として、砂糖製造に關する諸種の事業に従へり。近年は、其の數一萬二三千内外を上下せり。クインスランドに在る者は、白銅採掘の工事に従ふ。ニューカレドニアに在る者は、合算すれば、其の數百名以外に及ぶといふ。これ等の出稼人は、いづれも、移民會社などの募集に應じて渡航するを例とす。故に、生活上甚だしき不便を感じることなし。單身にて渡航する者も、彼の地の會社にたよりて事に従へば、さしたる不便に出であふことなし、とぞ。殊に、桑港附近、バンクーバー附



近などにては、食物も器具もゆたかに本邦より輸入せらるゝ故に、内地にあると大差なく、便宜多しとす。(坪内雄藏)

一四 大鵬

一、大鵬水撃翔るや三千里、

怒りて飛ぶ時翅を張れり。

翅を振ふや青天掩ひ、

雲氣をたちて、扶搖にうちて、

南溟さして、北溟出でて、

一撃九萬里飛び去りぬ。

二、この世に男兒と生れしこの身、

御國に寶を積まではやまじ。

無盡の富は海にぞ潜む。

行かれぬ海は世界にあらじ。

いで〜行かむ、南に北に。

鳥だにかくこそいでやいで。

三、水天髣髴かすかにみゆる、

數多の島山いづれの島か。

なきたる日和はるかのおきに、

うみがめ浮び、ふかざめをどり、

くぢらは高く潮を吹きぬ。

見れども、見あかぬ海のがめ。

四、事あるときまで漁獵やなさむ。

もとよりこの身は御國にさゝぐ。



南の海に占守のいそに、

千尋の底に眞珠を探り、

ふぶきの内に海馬を屠る。

取れどもつきせぬ海の寶。

(唱歌集)

### 一五 南洋の風光

南鳥島近海は、既に回歸線に近く、熱帶圈に入らむとする處にこれ有り候につき、全體の氣象、自然に温帶地方と相違致し居り候。海水は澄徹にして、其の色は藍靛の最も濃なるものにて、白き布を、これに浸したらむには、色麗しく染まるることなるべしと覺ゆるほどにこれあり、軍艦の汽笛を長嘯して、此の藍靛の如き海面を衝き破り行き候へば、雪の如き飛沫は、艦の兩側に湧き立ち、氣

象如何にも豪快に相覺え申し候。貿易風の區域に入れば、嫋々たる春の如き風は、軽く我が面を拂ひ來り、晴雨計も亦高度を示して、心氣殊の外清爽なる折柄、風位風力も規則正しければ、海波も亦規則正しくして、細かき紋を作り、艦體の動搖も規則正しく、此の際、天を仰げば、空氣の上に、眞綿の如き白雲フワリ〜と浮び其の間、亦白き雲片と青色の空片と、交る〜に相並びて、謂はゆる鯖雲を現はすなど、なか〜面白く見受け申し候。須臾にして、中天に、拳大の黒雲現はる〜と見るや、此の黒雲は、忽にして四方に擴がり、且つ、降り、地平線上、淡墨色となるや、眼前に冥色四合して、雨となり、颶風となりて、一時間、五六十里の速力を以て、迫り來り候へば、本艦の帆檣は、一齊にヒュー〜と鳴り、雨は此の風に驅られて、疾く降り來れば、宛がら篠を衝くが如く、忽ち、總員身體



洗ひ方。の號令下るや、言未だ終らざるに、三百七十の艦員一同、上甲板に上りて、降りしきる雨に浴して、終日の流汗を洗ひ去り、涼氣骨に徹するなど、到底陸上にある人士若しくは、温帶圈の海上にある者の、夢寐せざる處にこれあり候。小生も、十六年前、筑波艦の航海以後、再び此の天與の大水浴を試み、總選舉中の塵念を一洗致し候。既にして、風止み、雨晴れ、雲亦吹き拂はれ候へば、海面は、鏡の新たに磨かれたるが如く相成り、空と水との境界、殊の外分明となり、七色を鮮かに彩れる長虹は、地平線の一方より大空を横斷して、地平線の他方に入り、虹の反對面を顧みれば、夕照漸く影を收めて、黄金色の漣漪微に残り、其上より、紅色、紅黄色、黄色、淡紫色の雲は、滾々として湧き來り、二個若しくは三個の高崇なる雲の峰を作り、須臾にして、峰崩れて、金星閃として輝き、南天十

字星も亦、低く尾を垂れて、水天相交はる邊に、微に相見え候。やがて、夜も更け、枕上の潮聲に夢を覺まし候へば、衛兵の「右舷ヨロシイ」左舷ヨロシイの聲も、冴え渡りて、特に凄凉に感じ候。此の際、涼を納れむとて、上甲板に出て候へば、長烟一帶、海面を籠めて、缺月其上より現はれ、都會人士の得る能はざる納涼と存じ候。猶又、夜間、此の如き大納涼を試みるのみならず、拂曉、艦橋の上に登り候へば、曙色、東方の地平線上より來り、先づ、淡紅となり、紅となり、水に臙脂を溶かしたる如き雲現はれ、長風の裊かに來るなど、誠に得も言はれぬ心地致し候。先は、南航中の見聞、かくの如くに過ぎず候。勿々拜具。(志賀重昂)

## 一六 報効義會 その一



私が明治二十六年に、此の報効義會を組織しましたのは、其の當時、大層やかましかった彼の外國密獵船問題に關係してをるのです。この密獵船のことは、片岡侍從が、親しく千島を見廻つて來て、世間に公にされました。外人が、我が領海の内へ來て、密獵をするのを構はずに置くといふことはないといふ考で、不肖ながら、私は、それぞれの人に自分の意見を述べて、恰く同志の人を聚めて、この會を組織しました。それから、二十七年、二十八年は、支那との戦争の爲めに、大層仕事の撻取りが悪く、二十九年になつて漸くまとめて、總べての會員を占守島に移しました。

此の千島と相對して、岬の突き出てをる土地は、露領カムチャッカで、露西亞の南の端でございます。それより、僅か七哩ばかり隔てて、千島列島がございます。もともと、千島は總べて日本の領土で

あつたものでございますけれども、長い間、日本人は、ここを見まはらないで、打ち棄てておきました。又、樺太も、昔は奥蝦夷と稱して、日本の土地であつたことは、確かでございます。然るに、いつの頃よりか、彼の露西亞では、小學校に用ひて居る地理教科書の世界圖に、朱線を引いて、此の邊一體を朱線内に入れて、露西亞領としました。アリューシャン群島を、亞米利加にとられて後は、ベーリング海峽より擇捉の境まで眞直に、それより樺太の方まで、朱線を引いて、ここは露西亞領であるとして、小學校の生徒に教へました。それゆゑ、露西亞人民は、此の千島、樺太等は、全く自分の國の領分だと思つて來たさうでございます。

然るに、實際に於ては、樺太には、昔から日本人が澤山住まつて居て、現にここに漁業を營み、又、色々の仕事をしてをるものが、多勢



あるのでございます。さうして、此の兩國の國境は、纔に一本の棒杭を建てて目標とし、これより北は露西亞領、南は日本領と定めて置きましたので、國境の争は始終絶えませんでした。北風の吹き荒むときには、密かに露西亞人が来て、日本の人家を焼き、其の目標の棒杭を建て直す、南風が吹き出して来れば、日本人が密かに露西亞人の家を焼き拂つて、棒杭を段々北の方に移すといふやうなことで、大層國境の争がやかましくございました。

一體國境といふものは面倒なもので、佛蘭西と日耳曼との境の如きも、僅に一本の棒杭を以て兩國の境として、此の棒杭の前後三里許は、バッファアールグラウンドと稱して、此の三里内に起こつた喧嘩争論に就いては、兩國政府は、申し合はせて、一切取り上げないといふことにして、互に衝突を避けて居ります。さもないと、

此の國境に住んで居る人民は、わづか一錢の物を買ふにも、外國に往くのですから、外國旅行券を持って往かなければならんといふやうなことで、非常に不便を感じるわけでございます。

かういふ風に、國境といふものは、むづかしいものですが、況して其の昔の樺太のことゆゑ、お互に自分の領土を擴めようといふために、これらの行爲のあるのは、さのみ怪しくはないことです。然るに、その頃から今に至るまで、露西亞といふ國は一種特別な國で、バッファアールグラウンドを置かないのみか、自分の國境には、ちゃんと憲兵を配置して、一寸でも、他國人が這入つて来ると、旅行券をお見せなさい。といつて尋ねる。昔から今に至るまで、旅行券を持たずに、一歩でも境に踏み込むものがあつたら承知せんと、堅く守つてをります。我が國は、此の特別の露國と領土を接し



てゐたことゆゑ、始終争が絶えなかつた。若し此の争を募らせて  
いつた日には、遂には容易ならん面倒なことになる。然るに、  
我が邦は御一新の際であつて、國事は混雜して、内政の整はない  
時であつたから、この上に、外交の問題を惹きおこしてはこまる  
と云ふので、樺太を全く放擲して、其のかはりに、露領とたしかに  
きまつてもゐなかつた千島を我が國に取つて、談判が纏まり、こ  
れで、長い間の境界論もやんだのでございます。

處が、コロンビヤ、バンクーバー、ビクトリア邊に居る英吉利人や、  
亞米利加人が、以前は、アリューシャン群島に、獵虎、膾膾膾の獵を  
して居たのですが、だんだん海獸が千島の方へ逃げて行くもの  
ですから、英吉利人も亞米利加人も、その跡を追つて來て、千島で  
獵をするやうになりましたけれども、其の當時、千島は總べて露  
西亞のつもりであつたから、亞米利加人や英吉利人は、ちやんと  
露國政府に照會して、正當に税を納めて、營業を許して貰ひまし  
た。さうして、獵虎膾膾膾の營業を遣り續けてゐたのは、隨分長  
い間のことでございます。

### 一七 報効義會 その二

然るに、明治七年に交換條約が出來て、千島は日本の領土たるこ  
とが、世界に明になつたものですから、そこで、今まで、千島に漁業  
をしてゐたものが、改めて日本政府に營業繼續を願つて來まし  
たが、日本では、外國人から税を取つて、土地を貸して、營業を許す  
といふことは、先例がないといふので、斷りました。しかたがない  
から、定めし日本人が此處に來て、獵をするのであらうと思つて、



黙つて見ておました。

然るに、外國人には許さないといふだけで、日本人は一向千島で漁業を企てない。加ふるに、餘所では、大層獵虎、臘肭臍を攻めるのに、千島では、一人も取る人がないものですから、自然千島の方面に、獵虎、臘肭臍が集つて來たといふことが分りました。それに、日本人は一向漁業に著手しないのみならず、日本政府の役人も、一人として出張して居ない。これでは、そつと行つて捕つても、知れないだらうといふので、一艘來、二艘來、三艘、四艘と、ひそかに千島に船を寄せて來て、漁獵に従事した處が、これをすら日本人は少しも知らない。

遂に、十艘來、二十艘來、七十艘、八十艘と、だんだんに殖えて、到頭百二十艘の密獵船が來るやうになりました。處が、今度は、獵虎が、擇捉、得撫より寒流に連れて、下總の犬吠岬邊まで下つて來ることがわかつたので、密獵船もだんだん進んで、八戸、宮古、金華山沖邊まで寄せて來て、如何にも傍若無人のことをしました。

そこで、流石に我が國も、その輿論がやかましくなつて來たけれども、此の頃、日本人はまだ獵虎、臘肭臍の漁業を知らなかつたため、これに對抗する營業者が起らなかつた。その内に、日本にも、亞米利加の方に往き、或は外國船に乗り込んで、獵虎、臘肭臍の漁業に委しくなつた人が出て來たので、日本でも、帝國水産會社といふものが起つて、獵をするやうになりました。さて實際、其の場所に船を出すと、日本船は僅に一二艘で、外國船は十幾艘も來てをる。これでは、とても日本の營業にはならんと云ふことになつて來ました。そのころ、只今申した片岡侍從が、殊更に千島を見まは



られた。これは恐れ多くも、畏き邊の深い思召に出でて、千島の事を十分に調べられて、報告せられたのでございませう。そこで、報効義會といふものが起つたのでございます。

それで、私どもは千島に行つて何をしてゐたかと云ふに、一體千島の中では、擇捉島を除いては、占守、幌筵が一番大きい島であります。處が、此の地を無人の境界として、長く棄てて置くことが出来んといふのは、此の邊で、漁獵をしようとするには、占守、幌筵を本據として、船を碇泊させ、人を休ませ、水を取り、薪材を需めて、獵に取り懸るのであります。それ故、若し此の占守、幌筵を、日本人が堅く守つてをれば、外人が密獵に来ることが出来ない。これが占守、幌筵を占領した第一の理由で、今一つの理由は、北海道の沿岸の石狩川は、鮭、鱒が澤山のぼつてゐて、川の水よりも魚の方が多

いといふ諺がある位でありましたが、近來、漁業が盛になつてから、捕ることばかり盛で、殖やすことをつとめなかつた結果、北海道の漁業が開ければ開ける程、魚族がなくなつて、今日では、殆ど皆無になつて居る有様。然るに、國尻、擇捉、得撫と、だんだん魚族は、北寄の方に往つて、占守、幌筵の近傍で、澤山、鮭、鱒の漁獵があると、いふことが分つて來ました。占守、幌筵ばかりでなく、カムチャツカの沿岸にも、無数の鮭、鱒の居ることがわかりました。此のカムチャツカは面積は殆ど日本の三四倍あるが、人口は至つて少い。さうして、今申す通り、漁獲の見込があるにも拘らず、此處で漁業に従事するものが十人もない。又、カムチャツカ沿岸の漁産は、日本に來るより外、どうしても往く處が無い。亞米利加にも支那にも往かれない性質の者であります。何となれば、此處の魚類は、乾燥するこ



とが出来ない。乾燥魚なれば支那などには、幾らでも捌けるが、鹽漬の魚は、亞米利加人も支那人も食べません。然るに、日本人は、鮭、鱒の鹽漬を好み、て食べますので、歳暮の贈物などには、多くこれを用ひますから、此處の漁業が盛に開ければ、勢ひ其の漁獲した魚は、日本に來るより外、仕方が無い。處で、此處の魚をとつて、日本に送るには、どうしても、占守、幌筵の港を利用しなければなりません。それゆゑ、若しカムチャツカに眼を着ければ、直に占守、幌筵の必要を感じるのでございます。

そこで、私どもは、此の無人の境に往つて、家は固より一つもなし、持つて往つた糧食、器具、夜具、蒲團のやうなものを、皆原に投じて置いて、まづ足を踏む道から拵へ、地面を平にして、家を造り、子供や婦人からさきに家に入れて、だんだんに皆の人も家に這入るやうにし、巖を切り開いて、道を通じ、船を碇泊させ、漁場を開き、畑を開墾し、野菜物を植ゑて、今日、どうやらかうやら、まづ衣食住には差支なく、漁業の方法もちゃんと立つて参りました。口で言へば、これだけでございますが、此の間には、容易ならん骨折をしたので、或は、外國の獵船と談判をして、多少、火藥も燃やし、鐵砲も鳴らした結果、今日では、外國密獵船が、漸く一步も我が領海を侵す憂がなくなつたのでございます。(郡司成忠)

## 一八 占守島

### 第一章

長鯨息吹く北の海、  
五百重の浪を蹴破りて、  
日本男兒の勇名を、  
岩と固むる占守島。



第二章

嵐はさわげますらをの 胸の誠はなごめてむ。

氷はとぢよものゝふの 心の大刀は碎きてむ。

第三章

鰐の怒れるわだの原、 北の關門を守りつゝ、

わが日の本の英名を、 海と廣むる占守島。

(中學唱歌)

一九 トラファルガルの海戦

ナポレオンは絶倫の大豪傑なり。身を陸軍の一將校より起こし、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して一世に雄視せり。列國の群雄皆震懾屏息し、甘じて其の部下に屬せしが、獨り英國のみは孤立を守りて敢て屈せず。其の島國たるを利用して、優勢なる海

軍を備へ、海上の權力を握りて、屢佛軍を惱ませり。是に於て、ナポレオン畢生の力を竭し、雄兵十五萬をツーロンに集め、船舶二千三百隻を海岸に浮べ、二十餘海里の海峽を一躍して、英國を粉碎せむと欲し、先づ艦隊を四方に分ちて、英國艦隊を他に導き、其の虚に乗じて陸兵の大輸送を行はむとせり。當時、英國の海軍提督ネルソンは、ナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以て、己れが天職なりと確信し、其の將に大舉して英國を侵略せむとするを聞きて曰はく、佛帝たとひ鬼神なりとも、其の海岸を距る一海里の外に、決して出でしめず。と、直ちに敵の艦隊を追尾して、カヂス港附近に至る。佛國の提督ヴェルナブ死を決して西國艦隊と相合し、四十隻を督し、港を出でて英國艦隊と戦はむとす。ネルソン三十隻を率ゐ、進みてトラファルガルの邊に達し、



遂に敵艦隊と相會せり。時に西曆千八百五年十一月二十九日なり。

ネルソン敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總艦を分ち、二隊の縦陣と爲し、馳突してこれを截斷せむと欲し、副提督コリンウッドをして、其の一隊を指揮せしめ、風下に當れる敵の後殿艦より第十二位に列する艦間に進入するを命じ、親ら他の一隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫して、先づ一部を撃破せむと決す。佛將ヴェルナブ之を察し、其の艦隊を二列に排布し、前隊各艦の間に當りて、後隊の各艦を列せしめ、相依りて空隙なからしめたり。時に英國艦隊の旗艦ビクトリア號の上甲板に屹立せるネルソン、側なるブラックウッドを顧みて曰はく、汝は幾何の敵艦を捕獲すれば、勝戦たるを是認するか。と。ブラックウッド對へて曰はく、十五

隻を捕獲せば偉功と爲すべし。と。ネルソン頭を掉りて曰はく、廿隻を捕獲するにあらずんば、満足する能はざるなり。と。次いで、其の室に赴き、正装して燦爛たる幾個の勳章を胸間に懸け、肅然として天に禱りて曰はく、予が尊崇する上帝よ、願はくは我が國に赫々の大勝を授け、全歐の人民の困苦を救はしめよ。願はくは我が將卒をして、一人も卑怯の舉動をなす者なからしめよ。願はくは戦勝後、我が軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身惜むに足らず。唯國家に盡す忠節を憐みて擁護を垂れよ。と。禱り畢りて甲板に出づ。敵軍愈、近く、英軍の意氣益、旺なり。ネルソン、ブラックウッドに問うて曰はく、猶ほ一信號旗の掲げざるべからざるものあり、汝之を知るか。と。對へて曰はく、我が艦隊の將士勇氣餘りて互に競進せむとするの状あり。と。語未だ畢



らざるに、ネルソン急に信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。曰はく、英國は期して各自が其の本分の職を盡すを待つ。と。英國總艦隊之を望みて拍手喝采し、海波爲めに震翻せり。ネルソン莞爾として曰はく、今や予は準備に於て遺憾なし。餘は唯上帝と我が正義とを頼むあるのみ。ネルソンが國家に盡すべき一大機會に遭遇せるを深く上帝に謝す。と。次いで、接戦せよ。との信號旗を翻し、旗艦ビクトリア號前驅率先して進み、着弾距離に達するや、幾隻の敵艦之に向つて砲撃を開始し、飛彈交、ネルソンの頭上に轟く。ブラックウッド將に其の本艦に歸らむとし、ネルソンと握手して曰はく、余はまた速に本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる閣下の壯貌を拜すべし。と。ネルソン意氣軒昂、爽快の色眉宇に溢る。曰はく、ブラックウッドよ。上帝汝を守護せり。余は既に國家

の爲めに一身を犠牲に供すれば、再び相語ることを期せず。と。時に副提督コリンウッドの旗艦ローヤルサプエリン號は、其の隊の眞先に進み、健帆風を孕みて、西艦サンタアンナ號に向ひて直進し、其の艦尾に達して、二弾を重填せる左舷の大砲を一齊に發射し、忽ち之を撃破して、復た用ふる能はざらしむ。コリンウッド、艦長ロゼルアムに謂つて曰はく、提督、余が奮戦するを見て、何とか評せむ。憾むらくは之を聞かざることを。と。ネルソンも亦、遙にコリンウッドが勇戦の狀を指點し、欣然として艦長ハーデーを顧みて曰はく、好丈夫の意氣を見ずや。猛烈鬼神の如し。と。既にして、佛國諸艦皆目的を英國艦隊ビクトリア號に定め、飛彈急雨の如く、艦隊壊破し、索具斷絶し、兵士の戦死するもの頗る多し。然れども、なほ堅忍して一發も應砲せず。益進みて佛の提督ウ



エルナブの旗艦を索む。ヴェルナブ之を避けむが爲め、故らに將旗を掲げざりしが、ネルソン其の陣形より察し、第二位に在るブーセントール號の旗艦なるを看破して、猛然之に薄り、佛艦より痛撃を受くること十五分、死傷するもの五十餘の多きにおよべども、毫も屈せずしてこれに達し、先づ佛の艦窓に向ひ、小銃五百の一齊射撃を行ひ、續いて三弾を重填せる左舷の大砲を一時に放つ。波濤驚き、雲霧裂け、百雷の空中より落つるが如く、敵兵四百縦横に殪れ、廿門の巨礮毀損し、艦體大破して、また用ふること能はざるに至る。是に於て、ネルソン愈奮戦し、右舷の諸砲を以て別に敵艦レッターダブル號を砲撃しつゝ、終にこれに衝突す。佛軍辟易して下層の砲門を閉ぢ、檣樓より霰彈及び小銃をビクトリヤの甲板上に注げり。

この時に當り、英の諸艦長各、猛進して、皆佛艦と接戦し、兩軍の戦正に酣にして、奮闘幾んど一時ならむとするに際し、レッターダブル號の檣樓より一發の銃丸飛來して、甲板を急歩せるネルソンの肩に中り、これを倒す。衆駭き、四集して扶け起す。ネルソン、ハーディーを見て曰はく、佛奴われを狙撃して、彈丸脊髓を貫けり。恐らくは復た生くべからず。と。其の負傷を以て兵氣の沮喪せむことを恐れ、徐ろに手巾を出だして、面部と勳章とを蔽ひ、治療室に到り、兵士をして其の提督たることを知らしめず。時に佛艦襲撃隊を組み、將に侵入し來らむとす。英兵小銃を亂射して、之を却け、なほ、大小砲を連發して、佛兵の過半を殪し、終に降伏せしめたり。次いで、敵艦續々其の旗章を下して降を告げ、ビクトリヤ號の兵士拍手喝采して、歡聲雷の如く、苦痛に惱めるネルソンも亦、治療



室に在りて莞爾たり。會ハーチー枕側に來り報じて曰はく、捕獲敵艦十三隻に下らず。」と。ネルソン曰はく、我が艦敵に降り、大英國の旗章を汚辱する者なきか。」と。ハーチー聲に應じて、一隻もなしと對へ、手を握りて、復た甲板に上り、一時間を経て再び到る。ネルソン其の艦隊をして投錨せしめむとするの念切にして、これをハーチーに命ず。ハーチー曰はく、請ふ、艦隊の指揮は副提督コリンワードに任せむ。」と。ネルソン頭を掉りて曰はく、苟も我れの殘喘存する間は、何ぞ指揮を他人に委せむ。」と。既にして薄暮に至り、佛西兩國の聯合艦隊大敗して、砲聲全く收まり、ネルソンの氣息も亦奄々たり。左右乃ち口を其の耳朵に當て報じて曰はく、全勝われに歸し、敵艦二十隻を捕獲せり。」と。ネルソン之を聽き、首肯して、終に瞑せり。(小笠原長生)

## 二〇 イートン、ハローの學郷

英國の中學校にて、世界に名高きは、イートン、ハローの二校なり。共に英京倫敦の片田舎にありて、古來幾多の名士を出だせり。普通の學校とは、大にその趣を異にし、幽邃閑雅の境に、まばらに立てる數多の建築物あり。その全體が即ち學校にして、學校といはむよりも寧ろ、學郷といふを適當とす。教師の住宅は近傍に散在し、生徒は皆こゝに寄宿せり。生徒の始めて入學するや、父兄は最も信賴すべき教師を求め、鄭重の禮を以てその兒を託す。既に寄宿すれば、寢食、起臥、祈禱、娛樂、一にその家族と共にし、團欒たる家庭の内に、自らその性質品格を養はる。

元來、英國の教育は、知識よりも道德と品格とを重んじ、下、小學より、上、大學に至るまで、専ら、道德堅固、品格高尚なる英國紳士を養



成するを目的とす。而して、教場及び寺院は勿論なれども運動場も亦、この目的のために、甚だ大切の場所とせり。すべて、遊戯運動は、堅忍不拔の氣象を養ひ、一致協同の美德を成す。然れども、又對抗競争の際、勝敗の機一髪の間にありて、一心不亂になれるときは、往々野卑陋劣の手段を用ひ易し。イートン、ハーローにては、教師の監督、生徒の制裁、嚴重にして、己れを顧みず、身を挺して、身方の難を救ひ、或は、獨り敵中に圍まれ、百方苦戦して、猶ほ屈せざるが如きものあれば、拍手喝采して、これを賞讃し、露微塵たりとも卑劣の手段を用ふるものあれば、これを叱責して、寸歩も假さず。故に、遊戯運動の利益は悉く收め得て、寸毫も弊害を生ぜず。人物鍛錬に益する所極めて大なり。彼の歐洲全土を席卷して、氣宇内を呑みしナポレオンも、ワートルローの戦に、英の名將ウエリ

トンのために破られし時、歎じていへり、余は、ワートルローの戦場に破れしにあらず。英國の遊戯場に破れたるのみ。」と。ウエリントン將軍も亦、余が此のたびの勝利は、夙にイートンの學校にこれを得たり。」と言ひき、とぞ。以てその校風の美を推知すべし。又、これ等の學校生徒をして、偉人傑士たらむと欲する大決心を起さしむるものは何ぞや。學校は、創立以來、年所を経ること久しく、その卒業生にして、名聲を天下に轟したるもの少からず。而して、その肖像、遺物列せられて、博物館にあり。生徒は、學餘散策の際、屢行いてこれを見る。又、その卒業生にて内閣大臣、倫敦府知事、印度太守等に任ぜらるゝものあれば、その日は課業を休み、大にこれを祝す。嗚呼、己が最も敬服せる史上の偉人、現世の名士も、嘗て我れに等しき我が校の生徒なりしかと思へば、熱血あり、英氣あ



る少年の心中、鬱勃たる感慨なくして止まむや。殊に卒業證書授與式の日は、嘗て此の校に學び、今は顯要の位置に立てる當代の紳士、豪商來り集るもの數千、肅々たる衆人稠密の間に、拔群の生徒には、最も名譽ある賞與を授く。そは、この校より出でて、天下に大業をなしたる人のために、其の朋友等の贖金して購へるものなり。而して、若しバメルストンのための贖金ならば、バメルストンプライズといひ、その他、ウエリントンプライズ、バイロンプライズなど、皆その名によりて呼ばる。學校長は、これを授くるに當り、生徒を呼び出して、これは是れ、ロードバメルストンのために、その朋友の、贖金して作れるなり。バメルストンは、總理大臣となりて、如何に國家に盡瘁せしか。又、彼れは、クリミヤの戦争に如何に國威を輝ししか。而して、汝は今この偉人の賞與を受く。汝の感

果して如何。第二のバメルストンたるを欲せざるかなど、莊重に、懇切に告諭するを常とす。かゝる名譽を擔つて、誰か奮然として一大決心を起さざるものあらむ。

イートン、ハーロー中學校の實況の一斑を舉ぐれば、實に斯くの如きものなり。斯くの如き學校は數百年の歴史の賜なり。固より一朝一夕に成れるにはあらねども、その美風こそ慕はしけれ。

(三士忠造)

## 二一 運動會

運動會の目的は、一には、平素學業若しくは職業の爲に、精神を一方に向け居る者をして、其の心を轉ぜしめ、其の氣分を快活にし、其の精神を、休養せしむるにあり。一には、又身體の運動によりて、其の健康を増し、其の體力を進むるにあり。又、多數の者相集まり



て競争する場合の如きは、各自の天然の體力、其の練磨して得たる結果、正義、公平を重ずる念、忍耐の力、工夫の力、機敏の働等を較べ見る好機會を與ふるものなり。故に、運動會を行ふにあたりては必ず、これらの目的に適合する様に之を行ひ、兼ねて、競争の際にも、徳性を涵養せむことを勉めざるべからず。

此の目的を達せむが爲には、學校の運動會に於ては、其の學校の生徒は、其の技の巧拙にかゝはらず、盡く運動せざるべからず。然るに、今諸學校の運動會を見るに、此の主意に適せざるもの、甚だ多し。即ち、進んで競争するものは、特に運動に長ぜる一部の生徒に限り、一般の生徒は運動場に出てもせず、傍觀者たるに過ぎず。其の進んで競争をなすものは、唯、其の運動を巧にせむとする考より、平素學業を勵まざるべからざる時にも運動をなし、それら

のことにみに時間を費すに至るものあり。かくの如きは、平素一方にのみ、専ら用ひたる精神を他に轉じて、之を休養する必要より起れるにあらず。恰も、藝人の、演藝を以て見せ物とするが如し。又往々、かくの如き競争によりて、かくの如き賞品を得たりと誇るものあり。これ亦、恰も、藝人の、演藝によりて、顧客の報酬を得たるを喜ぶに似たり。適以て其の心事の陋劣なるを表白する所以なり。又、往々運動會のために、特に華麗なる裝飾をなし、或は、人目を惹くべき新衣を調へ、以て觀者の目を歡ばせむとするものあり。かくの如きは、亦、運動會をして一の見せ物たらしむる所以にして、決して其の本旨に適せるものといふべからず。

我れらの奨勵せむとする運動會は、前に述べたる如きものと異なり。學校の運動會に於ては、全校の生徒舉つて運動する様にせ



ざるべからず。競争の結果によりて、賞品を與ふるは強ひて咎むるに及ばざれども、徒らに高價の賞品を得むと競ふが如きは、抑運動の主意に戻れり。競争の目的は、平素自己の體力の強きを證するか、或は、其の鍛鍊の結果を自覺するか、或は、其の機敏、忍耐、工夫等の他に優れるを證するかにして、なほ將來の奮勵を圖るに在るべし。徒らに我が技の巧妙なるを人に示して、其の賞贊を博せむとし、或は、高價なる賞品を獲むが爲に、競争することあるべからず。故に、我らは優勝者に賞品を與ふるよりは、寧ろ其の平素の鍛鍊を證すべき徽章、賞牌等を以てせむことを望むなり。

又、我れらは學校の運動會を以て、其の學校に於ける平素の訓練の如何を示す機會に用ひむことを望む。即ち競争をなすもの、他人の妨害をなして、己れのみ勝たむとするが如き卑劣なる考を

有するものあるべからず。勝つには必ず公平の手段によりて勝たざるべからず。又、徒らに自己の力量若しくは熟練に依頼し、油斷をなして、其の實力の、己れに及ばざるものに勝を制せらるることあるべからず。或は、自己の力の到底他に及ばざるを自覺し、自己の能くすることをも爲さずして終るが如き無氣力者あらしむべからず。又、外來の客に對する場合等には、これに接する言語動作も亦、其の宜しきに適せしめざるべからず。凡そ、これらの點に於て闕くる所あるは、其の學校に於ける平素の訓練の足らざるを證する所以にして、恥づべきことなり。

かくの如く論じ來たれば、運動會は、決して一の見せ物にあらず。一方に於て、一の保養場たると共に、又一方に於ては、平素心身の鍛鍊如何を検すべき一の試験所となるなり。我れらは、世の學校



運動會が、かくの如き精神を以て行はれむことを切望するなり。

(嘉納治五郎)

## 二二 青年の夏季登山

およそ、青年の旺盛なる士氣を鼓舞し、遠大なる抱負を養成するは高山攀躋に若くものなかるべし。莫逆の學友兩三相携へて、都市の熱鬧を去り、田圃の間を徑して、幽谿に入り、手に清泉を掬して、苔石に踞せむか、松籟は頻に琴音を弄して、遠來の客を慰むべく、再び森林を縫うて、鳥逕を辿れば、泉聲幽に耳朵を掠め來るべし。かゝる現象は、到底沖積土裏の低地に齷齪しつつある者の味ひ得ざる興味なり。更に進みて、地ますます傾斜の度を増し、路も亦次第に嶮峻となれば、低原地方に於て、常に見慣れたる圓滑俗化の頑石は、次第にその跡を隠して、圭角稜々たる巉巖、磊落として、徑の兩側に整列して、嚴格に我が行を迎ふ。

既にして、溪澗を過ぎ、森林を出て、高きにのぼるに従ひて、氣溫漸く寒を覚え、空氣亦漸く稀薄となり、一步一喘、奄々として聲あり。先に進める友は、後なる友を勵まし、後なるは、先にすすめるものの危険を警め、相呼び、相應じ、互に扶け助けられて、この困難にうち勝ちて、やがて目的とする頂上點に達すれば、眼界たちまち開けて、一望涯際なく、遠近の群峰は兒孫のごとく脚下に集まり、田野の遠く開展せるは、恰も綠色の金巾を敷けるに異ならず。河流の蜿蜒としてこの間を走りて、海に朝するは、一條の銀綫に似たり。この時の快樂、氣宇、抱負、眼識等は如何。總べての心意は鼓舞作興せられて、天地の如何に廣大なるかを感じ、天然力の如何に壯大なるかを感じ、自然の如何に秀美なるかを知り、同時に又人事



の如何に些少なるかを解し、人力の如何に微弱なるかを感じ、俗界の如何に不潔なるかを了すべし。凡そ、吾人が始めて下層の塵芥よりその頭を離れて、天然と握手し、天然と語るべきは、この一時にあるを以て、始めて眞に自然界を知らむとし、又自然界を究めむとする念慮も亦、愈深くかつ切なるを覺ゆべし。嗚呼、青年の身體を鍊磨し、精神を修養するは、實に、峻嶽に攀ぢ、高山を蹈むの氣風を馴致するに若くはなかるべし。

日本人は、從來廉潔を以て稱せられ、雄壯を以て知られ、又義氣を以て讚せらる。蓋し此等の氣風は、日本が山國なるに負ふところ、甚だ少からざるなり。夫れ、平原は富の集まる所、優勝劣敗の劇しき所、しかして、又總べての不潔の集まる所、總べての罪惡の犯さるる所なり。これを以て平原國は富の程度は高し。然れども、住民

の氣風は卑し。平原國は物質的發達は盛なり。然れども、精神界は墮落せり。由來、神仙は山中にありと傳へ、高山大澤の間能く俊傑をいだと云ふが如きも、決してその故なきにあらず。

いふまでもなく、我國は有名なる山國にして、山中到る處に山岳聳え、登臨を試むべき邱陵、高山、古成層山、花崗岩山、火山等その擇むがままに、吾人の前に屹立して、選擇を待てり。我が國は實に登山至適の國と謂ふべし。茲に又青年有爲の士に向つて、登山に最好機會を與ふるものあり。何ぞや、避暑の休暇是れなり。それ、登山は夏期を以て最好時とす。高山は氣温ひくきを以て、他の期節の攀登に堪へず。著名の高山は、大概六月中旬より七月上旬に至る間を以て、山開きと稱して、始めて登山するを得べし。是れ恰も學生夏休の時なり。この登山の好時節に於て、この悠々として閑あ



る夏休あり。徒らに蝸屋に蟄伏して、暑熱を啣ちながら、不健全なる小冊子を嗜讀し、或は、解體放逸して午睡を貪り、數旬の好閑を碌碌に過さむよりは、寧ろ三寸の草鞋、三尺の輕箆を火山の岩角に試み、神心を千仞の雲間に修養すべし。我が日本の健兒よ。何ぞ奮つてこの好機會を利用せざる。(矢津昌永)

### 二三 高山の花

高山の絶頂又は絶頂より少し下の谷間などへ行つて見ると、奇麗な花が澤山に咲き揃つてをる。例へば、信州の駒ヶ嶽加賀の白山などのやうな高山に登ると、雪の間から現れてをる地面に、様々の花が咲いて、其の立派なことは譬へやうがない。平地には決して見ることの出来ない、珍しい草木が

生えてゐて、黄色、赤い色、紫色、白い色、其の外、様々の色の花が、一時に咲き亂れてをる。すべて、高山は平地と違つて、春も夏も秋も一時に来るやうな有様で、六月頃から段々雪が消えて、七八月頃の間が最も暖い。其の頃になると、四季の花が同時に咲くのであるから、平地で見ると、春先に咲く黄色い白い花、夏頃に咲く赤紫の花なども一處に咲き交つてをる。實に高山の花の色は、變化に富んで美しい。

是れ、實に三好博士が花の色の美觀に就いて談る所にして、我が國中部以北の高山に於ける御花畠は、高山植物の百花爛發する奇勝なりとす。地を抽くこと數千尺、白雲其の腰を繞り、漠々として人寰に遠き仙境、珍花奇草の紅紫相雜れる園は、實に宇宙間の一大美觀と稱す可し。若し高山に登る者、鬱葱として晝猶ほ闇き



喬樹の大森林を過ぎ、短矮の灌木林を経て、眼界頓に闊けたる山巔に出れば、四圍の山河一眸の裡に萃り、心氣の頗る爽快なるを覺ゆると共に、御花島の奇勝に酔ひ、百花の妍艶に眩惑し、身は羽化して神園の客となりしにあらざるなきかを疑ふべし。駿の富士峰は高しと雖も、此の勝に缺くるところあり。山稍低けれども野の日光、信の駒ヶ嶽、八ヶ嶽、白馬山、加の白山、陸の巖手山、羽の月山、鳥海山、北見の利尻山等、最も此の勝に富む。余が性、高山に登るを好み、既に踏攀したるもの十數、辛酸具さに嘗め、苦楚屢横はれども、而も登山癖を棄つる能はざるものは、偏に御花島の美觀を恣にせむと欲するのみ。

高山の草木、形短小にして、美大の花瓣を發き、雅致盆景に比すべく、其の奇巖の間に點綴せる花卉の嬌艶なる風姿に至りては、何の辭を以て賞讚すべきかを知らざるなり。

一と歳、盛夏の候、千島のアトイヤ山を超ゆ。殘雪猶ほ谷を埋めて皚々たる間に百草萌え、木に山櫻あり、草に龍膽あり、春秋の黄紫亂れ咲く。余は頻りに其の美觀に酔ひ、雪塊の上に踞して、低徊去る能はざるもの多時なりき。嗚呼。平地の花如何に美なりと雖も、到底高嶺の花の艶なるに比すべくもあらざるなり。

北見富士の頂上砂礫の間一奇草あり。千島雛罌粟と云ふ。淡黄の花瓣、殞露に浴し、可憐の風姿誠に愛すべし。又、釧路雌阿寒峰、硫烟渦き燃ゆる火口壁に、可愛の紅花やさしく咲けるあり。名は駒草。

烟り立つ岩間にもゆるくれなるの

いろもやさしきこまくさの花。

(川上瀧彌、森廣)



二四 我が家の富

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪、誰れかいふ狭くして且つ陋なりと。家、陋なりと雖も、膝を容る可く、庭狭しと雖も、仰いて碧空を望む可く、歩して永遠を思ふに足る。

神の日月は、此處にも照れば、四季も來り、風雨雪霰、かはるがはる到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜に觀ずれば、宇宙の富は、殆ど三坪の庭に溢るるを覺ゆるなり。

庭に、一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて、樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より、白き花ちらちらと舞ひて、一庭、須臾に雪を散らす。隣家に花樹多し。風に從ひて、飛花吾が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに、滿庭、花の衣を着く。

仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花のわが家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭々として、些の邪なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。これと手水鉢の側なる金剛纂とは、葉廣うして、わが家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の、滾々と地に落つる頃は、與へられて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくづくほうしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、ただ一株、前の家主の植ゑ残したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しといふも、秋のあはれ、閑寂の趣



は、却てわが庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁なりせば、獨憐、細菊近、  
荆扉とや吟ぜむ。恥づらくは、海内、文章落、布衣と唱す可き身にあ  
らざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして、滿樹金よりも黄なり。風の風  
起れば、其の葉翻々として翻り落つ。半夜夢さめて、雨かと疑ひ、曉  
に起きて、戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水  
鉢も處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と  
人はいふなる錦を、われは庭に敷きつめぬ。

木の葉落ち盡くしては、流石に淋しげなるも、日影、月影、いよいよ  
多くなりて、空を見、星を見るに障り少きは嬉し。(徳富健次郎)

新撰國語讀本 卷五終

明治三十七年十二月十七日印

刷

明治三十七年十二月二十日發

行

明治三十八年二月二十四日訂正再版印刷

明治三十八年二月二十七日訂正再版發行

新撰國語讀本全十册

定價 每册金拾七錢

著作者 保科孝一

發行者 前川一郎

東京市日本橋區通旅籠町十一番地

印刷者 石井要藏

東京市神田區三河町一丁目十四番地

印刷所 丸利印刷合資會社

東京市神田區三河町一丁目十四番地

所有權

發行所

學海指針社

東京市日本橋區通旅籠町十一番地







樂府詩